研修医・指導医リレーエッセー㉖

理想の指導医を追い求めて

岡山協立病院　プログラム責任者・指導医　一瀬　直日

自分が研修医だったのは、今から27年前のことである。医学部６年生になる直前の春休み、北海道家庭医療学センターのエクスターンシップに応募した。当時、日本では家庭医療学という分野はまだ馴染みが薄かったが、小児から高齢者、さらには妊産婦まで、誰もが対象となるその専門性に強く惹かれた。病気になれば町の診療所に行き、家族も親戚も皆が同じ医師に診てもらっていた――そんな自分の原体験と、家庭医療の理念がぴたりと重なったのである。

幼い頃にお世話になっていたかかりつけ医の先生は、当時５～６歳だった自分に「直日君はお医者さんになって、ここを継いでね」と優しい笑顔で語りかけてくれた。診療所の待合室はいつも混雑しており、順番を待つ患者は常に20人ほどいた。多忙を極める先生の姿を見ていた自分は、「うん、わかった。僕、手伝うから」と、幼心に真剣に応えていたことを覚えている。

医学部卒業後、北海道家庭医療学センター第３期生として研修医となった。同期は３名で、そのうちの１人は現在、日本プライマリ・ケア連合学会理事長を務める草場鉄周先生である。当時は卒後臨床研修がまだ必修化されておらず、多くの研修医が臓器別専門科へ進む中で、家庭医療を選んだ自分たちは、研修先で「何を専門としているの」と日々質問される存在であった。

内科系、外科系、小児科、産婦人科、麻酔科、皮膚科、精神科、そして家庭医療科と、１～３カ月ごとにローテーションする研修は、現在では一般的となっているが、当時は国内でもごく限られた施設でしか行われていなかった。統括する指導医は出張が多く不在がちで、上級医といっても学年が１～２年上なだけである。誰もが自分のことで精一杯の中、幅広い分野の知識と技術を習得しようと必死だった。スマートフォンはもちろん存在せず、インターネットで得られる医学情報も乏しかった時代である。紙の教科書や雑誌が、最も重要な情報源であった。

その後、2022年４月より岡山協立病院総合診療科において、研修医・専攻医の教育を専任で担う機会を得た。自身の研修医時代の経験から、「同じ苦労はさせたくない」と強く思い、「こんな指導医がいたらよかった」と自らが切望した理想像の実現を目指して、教育環境の整備に取り組んできた。

現在は、入院主治医を持たず、研修医からすべての患者について相談を受ける体制をとっている。ともにディスカッションを行い、ベッドサイドで診察や処置を指導し、分かりやすい病状説明の方法については、同席のうえでフィードバックを行う。中心静脈穿刺や縫合についてはシミュレーターを用いた実技指導を行い、身体診察に基づく臨床推論については通年のレクチャーで体系的に指導している。また、臨床研究についてもテーマ設定から関わり、学会発表や論文作成まで支援している。さらには、院内の調理室でともに昼食を作り、スタッフに振る舞うといった取り組みも行っている。

紙幅の都合でその他詳細は割愛するが、理想とする指導医像に少しでも近づけるよう、日々精進を重ねている。

年３回行われる“ドクターメシ”。研修医・専攻医・指導医が一緒に食事を作り、コミュニケーションを深めるイベント。奥右端が筆者